

ゆりかごから墓場まで 3

生活・労働の主人公として生きる

乳幼児期に根っここの力が育まれて



津留見純子
里中正也

えます。すばるは生活介護20名、就労継続支援B型10名、計30名定員の事業所で、現在32名の知的障害のあるなかま（内10名が身体・精神の重複障害）が通い、そのうち13名のなかまは法人内のグループホームと福祉ホームで暮らしています。勇平くんは自宅から送迎車で通所していますが、天気の良い日は公共バスを利用して帰宅します。

すばるには、パンを製造・販売する「食品加工班」、古紙をつかったポット（鉢）づくりや資源回

「おはよう」と勢いよくパン工房のドアを開け、元気にあいさつする勇平くん。「すばる」での仕事は食品加工班の鉄板洗い。身長140センチと小柄な勇平くんが1枚2キロほどもある鉄板を40枚近く洗いきります。

■早期療育第一世代の勇平くん

1985年12月生まれの丸田勇平くんは生後間もなくダウン症と診断され、生後6カ月のときから、当時無認可だった鹿児島子ども療育センターに通いはじめます。「これからどんな風に育っていくのか見通しがもてないなか、子育てへの不安に心が揺れ動いていた」という母親は、マンツーマ

ンの療育を通してわが子への向き合い方を学んでいきます。同時に母親の不安や焦りを受けとめ、「大丈夫だよ」「一緒に育てていきましょう」と寄り添い、励ましてくれる療育者の存在が、安心の子育てへの一歩を踏み出すうえで大きな支えとなっていたということ

です。勇平くんは鹿児島で早期療育を受けることができた第一世代といえます。1980年代、鹿児島では障害児療育の場自体がきわめて少なく、ましてや0歳からの早期療育のとりくみはほとんどない状況でした。そうしたなか、「0歳からの療育の場を！」とのねがいのもと、鹿児島子ども療育センター（1986年開所）の実践と運動

が展開していきます。療育センターはその後、「赤ちゃんからお年寄りまで誰もが安心して暮らせるまちづくり」を掲げ、麦の芽共同作業所との合同法人認可運動にとりくみ、1992年認可された社会福祉法人麦の芽福祉社会内の施設になります。

同一法人内に乳幼児期から青年・成人期、さらには高齢期まで全ライフステージにわたる、発達・生活・労働・余暇などの支援を展開する条件がつけられていきました。

■すばるの紹介

成長した勇平くんは2006年、法人内に新規開設した「すばる」に入所し、今年で11年目を迎



無認可の鹿児島子ども療育センターの親子教室で小麦粉を使つての感触あそびを全身で楽しむ0歳時期の勇平くん。

収をする「リサイクル班」、手芸などの「創作班」、草木染などの「アート班」の4つの作業班があります。班の所属は、なかま本人の希望や持ち味などを踏まえつつ、スタッフとなかまが一緒に探りながら決めていきます。班の人数は6〜10人です。

■勇平くんの仕事は鉄板洗い！

勇平くんは食品加工班に所属しています。パンの成形はスタッフで行っていますが、パンを製造する「一次発酵後の丸め作業」「たまごぬりなどの仕上げ作業」「鉄板洗い」などの作業工程はなかまたちが担っています。

勇平くんはスタッフと一緒にいろいろな工程を経験するうちに、あ

る日、洗い場に積み重ねられている「鉄板」を自分から洗いはじめました。自分にもできる。という手ごたえを得たのでしよう、この日を境に鉄板洗いに専念するようになりまし。洗うことにたくさん積み重なった鉄板が減っていくという視覚的な達成感も持続する力につながったようです。「勇平くん鉄板、お願い」というなかまからの声かけは、やる気を大いに高めていきました。こうして鉄板洗いは勇平くんの役割となりました。

張り切って鉄板を洗う勇平くんですが、その洗いはさっと簡単に洗って済ませるといふものでした。しばらくすると勇平くんが洗った鉄板をオーブンの予熱で乾か

す担当のAくんが、洗い残しを指摘するようにになりました。はじめは、なにを指摘されているのかわからなかったようですが、Aくんの指摘をスタッフが仲介して勇平くんにはわかるように具体的に伝えらると、徐々に、汚れが残っていないかに注意深く確かめながら洗えるようになっていきました。

勇平くんの仕事ぶりにまわりのなかまも彼への信頼を強めていきます。鉄板洗いは誰にもとってかわることのできない自分の仕事だという誇りの感情、自分への自信、そしてなかまの一員として仕事をやる喜びが勇平くんのなかに広がっているように思えます。他者からの強制・強要ではなく、自らの内的な要求のもと労働の主体となり、他者と協同しながら自分を信じ、自分づくりをすすめる勇平くんです。

■「いい仕事をした」という「仕事観」を大事にした

麦の芽では、「さてひと仕事するか」「今日はいいい仕事をした」という身近で素朴な言葉のなかに込められた「仕事」への思いを大事にしています。その「仕事観」には、「自分自身の存在感・生き方・人生が重なりあった自分づくりの、個性労働」的なニュア

スがあります。勇平くんは鉄板洗いをやり終えたとき、「終わったよ！」となかまに向かつて伝えました。それはやり遂げたという達成感のこもった言葉です。勇平くんはまさに「いい仕事をした」という実感のもてる労働生活を送っているといえないでしょうか。

同時に「働きたい・生きがい・誇り」のもてる労働とはなにかを、私たちスタッフはなかまたちによって絶えず問い直すことを求められているといえます。勇平くんはパンの販売活動には消極的でした。試行錯誤するなかで、彼の大好きな職員のいる事業所にパンを届けることを始めました。「○○さんパン持ってきたよ」と大きな声で声をかける勇平くん、「ありがとう！」と職員。大好きな職員に喜んでもらえてうれしそうです。

こうして販売への苦手意識が少しずつ変化していきました。販売するということは、モノが売れてうれしいということだけではなく、他者と喜びを共有することでもあるのだと改めて教えられました。

さて、これから勇平くんが販売というものにさらにどんな意味を見出し、自分づくりの歩みをすすめていくのか、スタッフとしてそれをどうサポートするのか、追求していききたいと思えます。



▲パン工房で、真剣に鉄板を洗う勇平くん。